

俣は迂餘曲折した道を登つていつた。新緑の山は蒼茫として暮れてきた。爽かな若葉の薫が夕風とともに漂ふてゐる。俣の上から振顧つてみると、吉野川の溪は遠く暮靄の底に開けて一と條の清流が其間をうす碧の布を敷いたやうに長く横つてゐる。上流の方にはこんな山の中にはめづらしく家並のつた上市の町の瓦葺粉壁が蒼茫とした暮色の中に見えて、美しい電燈の瞬きが眺めてゐるうちに、だん／＼艶かしく數を殖やしてきた。何もなく寂しい山路の旅をゆく者の心を引着けずにはおかぬやうに思はれる。

「上市といふ處は山の中にはめづらしい大きな家が揃つてゐるぢやないか。」私は俣の上から聲をかけた。

「えゝ、なか／＼えゝとこです。金持ちがたんとこはりますさかいな。金持ちはみんな林業家です。」

「成程なるほぎ、美しい杉林を有つて好い商買だナ。」

「さうです。材木商の集るとこですさかい、金はたんと落ちますわ。藝者も多勢居りますしな。宿屋や料理屋になか／＼好えのがごあります。」

「さうだらう。かうして此處から見ても何だかそんなに思はれる。」

私はわけもなくその般賑な上市の町にいつて一晩泊つて見たいと思つた。それは今始て、遠くの暮靄の底に夢のやうに美しく見えてゐるを見てさう思つたのではない。前にもいつたやうに、此吉野川にはまだ見ぬ以前から永い間憧憬を寄て、この山の中の上市の町の幻影をいろ／＼に描いてゐたのであつた。それを今蒼茫とした暮靄の底に遠くから眺めるところによると、かねて空想に描いてゐたのと少しも違はないやうに思はれたからである。六田の吉野驛から、吉野川に沿ふた半里ばかりの平坦な道路がその町まで白くつゞいて電燈が道のところ／＼を照してゐる。

道はやがて一の坂を過ぎて、吉野の宮の前を行くころは、山の中はもうすつかり夜になつてしまつた。尙暫く登つて、やがてやゝ急坂を上ると、車夫は暗の中に大きな松の樹が枝を翳してゐる崖の下をゆきながら、その崖の上に村上義光の墓碑の立ててゐることなきを語つてきかせた。すると、今日初瀬寺に詣うでた時分から、ひどく蒸暑かつたと思つてゐたのが、いつしか強い颯風に變つて、あたりの草木を吹き靡かしてゆく音がざわ／＼と闇の中に聞える。大空は黒く搔曇つてゐるが、處々雲の切目から見えてゐる星明りに遠くの山が波濤のごとく重疊してゐるのが眼に入る。私の胸のうちには懐古の情が油然として湧き上つてくるのを感じた。車夫は時々轆棒の手を休めながら、此處から見たのが下の千本、こゝを左に下つてゆくと七曲りなぎと教へつゝゆく。やがて大橋を渡り、急な坂を上へのほると道の左右に民家がつゞいてきて、旅館の燈火が明るく道を

吉野朝の遺蹟
を踏んで著者
の魂は遠くあ
りし昔の面影
を忍ぶあたり
出色の大文字
である。

照してゐるところへ辿り着いた。旅館の番頭達は二人抱きの俵がたゞ一つ、もう花の過ぎた今時分の夜道に途まどひしたやうに上つてきたので、それを見るに忽ち俵の傍に寄つてきて、
「お早うござりました。さうぞ手前さもへ。さうぞお仕舞ひになつて。お座敷もよろしい處が置いております。」
と、口々に聲をかけた。けれども今日三輪に着くまでの汽車の中で老紳士に教へられたのはも一つ上の宿といふので、私は銅の華表を通りこしたところにある芳山館の前で俵をおりた。
花の過ぎた時分とて泊り客は一人もなさゝうで、伽藍とした大きな座敷のつゞいてゐる廊下を一番奥の方に案内せられた。先刻の嵐は、いつの間にか雨になつたと思はれて、閉め切つた雨戸に凄まじい颯風と一緒に降りかける音が消魂ましく聞える。あまり蒸暑いので、廻り縁の雨戸を

少し繰りあけさすと、内から射し出す電燈の明りの影に、大きな櫻の木が吹狂ふ嵐に「わぐ」と枝を揺られながら緑の葉から、ばら／＼と飛沫を立てゝゐるのが、きら／＼闇の中に輝いてゐる。私は、藤井竹外の古陵松栢吼天鷹、山寺尋春春寂寥、眉雪老僧時歇籌、落花深處說南朝といふ少年の頃讀じてゐた古詩を思ひ起した。さう思ふと何となく今晚のやうに一天暗くして暴風雨の吹すさぶ夜が、吉野の地を遊覽するにはふさはしいやうに感じられてきた。私は屋外の風雨の音に凝乎と心を澄ましながら獨り黙然として羽絨を脱ぎ、帯を緩めて座を占め、今身の吉野に來てゐることを靜に思つて見た。

あまり風が強いので立てゝゐなかつた風呂を、私の爲に急いで沸してくれたりした。其風呂に入つて私は朝からの汗を洗ひ流し、旅の疲れを休めた。やがて、此土地の産れだといふ質樸な下婢が牛肉や玉葱を多く用

ゐた鄙びた膳を運んできた。それにはすこし辟易したが、私、此山の中なかに來て都會の者の口に合ふやうな食べ物ものを、めるのは間違つてゐる、吉野には美味を欲してはる／＼上つて來たのではないから、と思ひながら箸を取上げて初瀬の晝餐から何にも入れなかつた空腹を潤く充たした。膳を下けさすと、何より繪葉書を命ずると近處の葉繪書屋の女房が繪葉書その他の吉野名産の櫻花漬つひなごを持つて座敷に入つてきた。これからまだ旅から旅へ漂泊しようとおもつてゐる私には、こて／＼した土産物なごは無用なので繪葉書を二組みばかり取つて、早速それを東京や郷里の方へあてゝ書いた。

さうしてゐる間も戶外の風雨は倍々荒れ狂ふて、凄じい力で櫻の枝葉を吹撓めてゐる。蒸々するやうな暖い雨は一仕切り、バケツを覆へしたやうに開放つた縁外の軒から流れ落ちた。私の心は、丁度その強雨の音に、

いよ／＼落着いてきた。いろ／＼な悲壯な感懐が豪雨の奏する激しい音楽につれて湧いて来た。俳人支考が、

歌書よりも軍書にかなし吉野山

と詠じた心持ちに似たやうな感情が私の胸に滲んで来るのをおほえた。明日の見物の案内の相談かた／＼宿帳を持ちそへて話しに來た番頭は、

「まだ奥の千本には幾らか花が残つておりましたが、この嵐でみな落ちてしまひます。折角遠方をお越しになりましたに生憎のことでござりま

す」

「あゝ奥の千本にはまだ残つてゐたでせうな。」といひつゝ私はまた、西行の歌を思ひ浮べた。

吉野山花のさかりは限りなし青葉の奥もなほさかりにて

「いや、花はなくなつても結構だ。却つて客が雑沓してゐる頃よりも丁度今時分の方がいゝです。」

そして私には、吉野朝廷君臣の悲壯なる物語や、義経、静、忠信等の美しい哀史に對しても向より深い追懐を感じるのであるが、それよりも私にとつて多年熱情を寄てゐたところは、その奥の千本にあるといふ昔清水や、西行が隠棲の跡であつた。私には南朝君臣の忠勇武烈な行爲や義経主従の情緒纏綿たる別離の悲哀などの、あまりに歴史に顯著な、そしてあまりに華麗な事蹟であるのよりも、寧ろ西行や芭蕉の寂しい瞑想の生活の方が今は自分の生活に近いやうにおもはれて、私の今度はじめ吉野の地に分け入つた最も奥底の精神は、そのとく／＼の泉にあるといつてもよかつた。

とく／＼と落つる岩間の昔清水汲みほすほごもなき住居かな

著者の人格が
短い文章の中
にはつきりと
現はれてゐる

また、その西上人の跡を慕ふてこゝに辿り來た後世の芭蕉は、

かの、とく／＼の清水は、むかしにかはらずと見えて、

今もとく／＼と雫落ちける。

露とく／＼こゝろみに浮世すゝがばや

若しこれ扶桑に伯夷あらば、かならず口をすゝがん。もしこれ許由に

告げば、耳を洗はん。

とも云つてゐる。

西行は岩間からしみ出る清水さへもあり餘るといふほどの消極的な生活をしてゐる。もとよりさういふ消極的な生活は到底今の吾々には實行出來さうもない。そしてそれを南朝の君臣、義經主従の事蹟なきに對照してみると、そこに無限の人生觀を展覽することができると思はれる。飽くまでも積極的な、煩惱の強い、人間慾の旺盛な生活と、極端に消極

的な、閑寂な、覺悟した生活と、人間の抱いてゐる極端と極端との生活の様式が此處に歴々と示されてゐるかのやうである。その意味に於て吉野は見やうによつて單に歴史の表面を飾つてゐる事蹟のみばかりではない日本人の長い間の思想史を披いて見せてゐるのである。

「かうひどく降りますれば、明日は却つて霽れるかも知れません。どうぞお静に。」

といつて、番頭は寢床を設けて、雨戸を閉めてから退つていつた。

私はどうかすると頭が冴えて、いろ／＼な聯想が綿々として湧き上らうとするのを、強ひて忘れるやうにして明日の遊覽を胸の奥に樂み抱くやうにして眠を急いだ。

嵐は夜半までもつゞいてゐた。そのために又しても睡眠を破られたが、

そのうちいつの間にか、ぐつすり眠つてしまつた。

翌朝目覺めた時には昨夜の雨はすつかり霽れて、美しい日の光が雨滴のしたゝる新緑の葉々を照らしてゐた。朝飯を済まして案内の番頭と連れ立つて出たのはもう十時を過ぎてゐた。藏王堂の二王門から上つて、まづ本尊金剛藏王大權現を拜する。藏王堂は普通に大和大峰山と呼ばれて、夏季白衣の登山者の多い金峯山寺の本堂で、山内第一の巨刹である。天武天皇の白鳳年中役の小角の草創、日本、驗道の根本道場である。本尊藏王ノ權現は三丈六尺、二丈四尺、二丈二尺の立像の木像三體を安置し、何れも憤怒の容貌惡魔降伏の姿勢を示してゐる。釋迦、觀音、彌勒の變化の相を想化し表現したもので、右手に三鈷杵を握り、左手は五指を腰に當て、赫つと四邊を睨んで右脚を高く擧げ天地經緯の剛嚴なる相形を表はしてゐる。小角、金峯山上に籠り、救世濟度の爲めに大自在、大威力

薩埵の出現を祈りしに、初は柔和忍辱の地藏菩薩現はれ、次で彌勒菩薩が現はれた。然るに尊者以爲らく、末世の衆生は上世と同じからず、かゝる慈悲圓滿の相貌にては現未の剛邪濁惡の衆生を濟度すること難しとて更に潛心凝思して熱禱已まざりしに最後に嚴然として示現したのは金剛藏王大權現の尊影であつた。小角それを見て、これぞ我が祈求する尊影なりと。合掌讚嘆してその感得するところを尊體に刻み、大峯山上に安置したと傳へられてゐる。

その後本堂は屢々兵燹に罹り、立像も小角の感得せる薩埵の意を體せる後世の彫像で、いづれも足利初期の創建になり、木材堅牢、規模雄健、當時の特徴を遺憾なく發揮してゐると云はれてゐる。

私は吉野保勝會で發行してゐる吉野名勝案内を披きながら、番頭の案内するあとから蹤いて見て歩いた。

太平記に「……去程に武藏守師直、三萬餘騎を率ゐて吉野山に押し寄せ、三度関の聲を揚げたれども敵なければ音もせず、さらば焼き拂へ」とて皇居並に卿相雲客の宿所に火をかけたれば、魔風盛に吹き懸りて、二丈一基の笠鳥居、二丈五尺の金の鳥居、剛力士の二階の門、北野示現の宮、七十二間の回廊、三十八所の神樂屋、寶藏、竈殿、三尊光を和けて、萬人頭を傾くる金剛藏王の社壇まで、一時に灰燼となりはて、煙蒼天に立ち上る。あさましかりし有様なり。」

と書かれてゐる。太平記一流のいかにも壯な形容である。併し此處の文章は必ずしも誇張ではなかつたらうとおもふ。今見る剛藏王大権現の力そのものを表象せる勇猛剛健の相形と相待つて、五百年前の當時をまざぐりと追想することができる。また事實吉野の地が歴史上忠臣烈士の蹟に富んでゐて、篤信敢行の士を輩出したといふのは役の小角が

著者が歴史觀に於ても極めて偉れたる觀察眼の所有者であることが分る。

潛心熱禱の餘に感得した惡魔降伏の思想に淵源するところが大きいのではないかとおもふ。古武士には敢てめづらしからぬことではあるが、取分け楠河州は稀れに見る神佛の敬神家であつたらしい。そしてその神佛に對する信仰心は武人としての行爲の上にも篤信敢行の人として顯はれた。古往今來恐らく楠河州くらの自分の行爲に對して篤い信仰を抱いて事に當つた人は我が日本人中にも比儔があるまいと思ふ。忠君奉公の意味と、其身體は狹義に解する時は往々膠柱の偏見に囚はれ易い憂ひがあるが、ひとり楠氏父子ばかりではない、南北朝當時の忠誠なる武士の行爲は、全く宗教的の信仰から發露した行爲であつた。彼等武人の念頭には正統天子に對して忠義を抽んでるといふことは直に神に對する篤信の行爲にほかならなかつたのである。さう思つて見る時は既に前にもいつたとほりに、楠氏の信仰心に富だ行爲は萬世の後を照すこと日月と光を争ふ

といつても可いのである。それは今日の如き散文的なる産業時代にあつても、ごしかに吾々の行爲の規範を示してゐるのである。楠氏の如き篤信敢行の事蹟は在來の窮屈偏狹なる日本人の倫理思想に依つて解釋しやうとするがゆゑに、屢々それが今日に用ゆべからざる硬化定着した規範となるのである。それでは實に残念なことではあるまいか。楠氏の事蹟は當時に在つては主として統天子に對して忠誠のかぎりを盡したものであつたに相違ないが、その人間としての精神は飽くまでも宗教家に見る如き信仰の行爲であつた。私は今日の如き大産業時代に於ては楠氏の如き、日本人の精華もいふべき立派なる人間が單に狭固陋なる道學先生の手にのみ委ねられて、吾々の日常生活は風馬相關せざるものとして忘れられ、それに新解釋を加へて新なる生命を復活せしむることを敢てするものゝないことを、平世から遺憾に考へてゐた。今役の小角が河

内の葛城山に入りて三十年の間苦修練行した神秘的な事蹟や、金峯山寺開創の由來など、吉野朝の忠臣烈士の行爲とを併せ考へて、楠河州の忠勇武烈は遠く役の小角の教化に淵源してゐることを深く思はせられたのである。

私はそんなとを次からつぎへと思ひながら、番頭の後について此度は吉野皇居の址に行つた。懐古の客をして最も心を悲しましむるものは實にその金輪王寺の址である。そこは藏王堂の仁王門から右一丁許、藏王堂の小丘の裾をめぐつて西に行つたところにある、約三段歩ばかりの平らかな臺宅地になつてゐて、今は眞青な春草に彩られて一本の杭が宮殿の址をそれとを示してゐるばかりである。處々に立つてゐる櫻は、もうすつかり青葉になつて、わづかに葉がくれに一つ二つ白い花瓣が散り残つてゐるのも、思ひなしにか心を傷めしめる。

私と番頭とはその聖宅地の崖の上に立つて、やゝ暫らく低徊瞻望しながら話した。そこからは波濤の如く起伏せる吉野山の脈を越して遠く西の空に、頼母しさうな剛山の雄姿が、昨夜の雨に洗はれて一入句かな藍色を見せてゐる。

「手前どもがまだ十二三の子供の時分までは昔の御殿が幾分かまだ残つておりまして、よく廊下や縁の上を駆けまはつて遊んでゐたのを記憶いたしております。」六十あまりの番頭はさういつて語つた。

「それから彼處の溪の底に少しばかりの竹藪が見えております。」といつて、番頭はすぐ眼の下に見えてゐる深い杉林に被はれた溪間の竹林を指しながら、

「あの處が村上義隆の戦死したところでございます。義隆は父の義光が自害するのに心を残しながら、父の命に背くわけにもまゐらず、どこま

でも大塔ノ宮の御先途を見まゐらせやうとして、あの狭い溪道まで御供をして落ちてまゐります。敵勢五百騎ばかり押寄せ来ましたので、無勢に多勢。どうすることも出来ませんので、義隆只一人踏み留つて其等を斬伏せきり伏せして居ります間にまぎれて宮は難なくそこを落ちのびて十津川を経て高野山へゆかれましたのでございます。」

彼は、昔の太平記讀みのやうな敬虔な口調で、物譚りをつづけた。

私は、じつと始終を聞きながら、眼を上げて十津川の方へ落つてゆく間道に遠く重疊してゐるのが仰がれる。私の心はそれやこれや、萬古を知て萬古語らぬ悠久たる自然と、古い歴史の幽光とが麗らかな春光の中に融けて胸に滲み入るやうに思はれた(七年八月七日高野山にて草す)

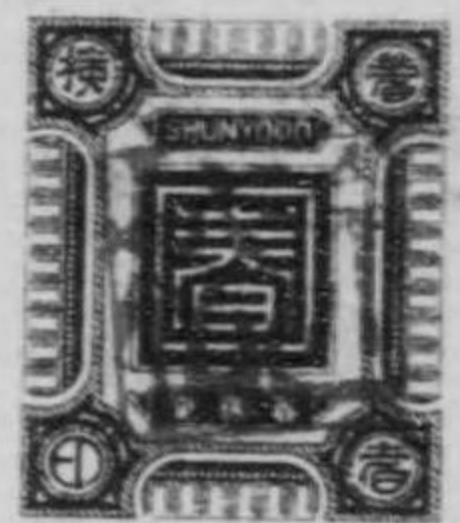
大正十年十月十七日印刷
大正十年十月十八日發行

定價金八拾錢

自然と人生叢書

第十編
(煙霞)

著者 雄作 印



著者 德田秋江

發行者 和田利彦

印刷者 川崎安治郎

印刷所 東京市京橋區南銀治町十一番地
川安印刷所

■ 圖書目錄

■ 發行所

東京市日本橋區通四丁目

春

陽

堂

電話本局五一
振替一六一七

25/2

新 興 文 藝 叢 書

新 興 文 藝 の 大 潮 は、
 今 世 を 蓋 ひ 滂 湃 と
 して 漲 る。 吾 人 は、こ
 の 旺 盛 な る 大 潮 を、
 最 も 力 強 く 象 徴 す
 る 有 数 の 傑 作 を 最 近
 年 間 の 文 壇 に 求 め、
 こ れ を 瀟 洒 な る 列 冊
 と して 出 版 せ り。 精
 れ、 新 興 文 藝 の 精 髓
 を、 新 興 文 藝 の 下 に
 選 集 す。 一 時 同 時 人
 現 下 の 文 藝 を 知 ら ぬ
 と する 人々 の 時 間 の
 冗、 勞 力 の 煩 を 避 け
 しめ、 理 想 的 に 統 一
 的 に 我 が 文 藝 の 内 奥
 を 窺 は しめんとす
 る の 力 に 觸 れんとす
 る 人 は 本 叢 書 に 就 け
 ば、 諸 君 の 來 たり 奪 ぶ
 に 任 せ ん。

田山花袋著	正宗白鳥著	長田幹彦著	谷崎精二著	小川未明著	森田草平著	志賀直哉著	里見 淳著	芥川龍之介著	有島生馬著	菊池 寛著	長與善郎著	豊島與志雄著
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
一 握 の 藁	波 の の 上	秋 の の 歌	蒼 き 夜 と 空	小 作 人 の 死	初 戀	或 る 朝	不 幸 な 偶 然	鼻	葡 萄 圃 の 中	恩 を 返 す 話	陸 奥 直 次 郎	二 つ の 途

各 冊 金 八 拾 錢 送 料 各 六 錢

終

